

乃木坂スクール「発信力を磨いて、社会を変える・倫理を変える
～現場から・当事者から、その物語～」

受講日：2015/10/14 第3回 倉田めば先生

さやさやと

医療福祉ジャーナリズム分野修士1年
藤原なおみ

そこにいる、ということ。

めばさんの「ことば」にもう少し近づきたくて、
昨日、日比谷公会堂に出かけました。
霧雨のせいでしょうか。それとも建物に刻まれた歴史のせいでしょうか。
入口に立ったときから圧倒されるような雰囲気の中、
ダルク 30 周年の会場の片隅で、
わたしは、その濃い空気をおそるおそる呼吸していました。

ダルクとともに自分の人生があったという大学の先生や
ダルクの創設者近藤恒夫さんに4年の執行猶予をつけた元最高裁判事さんのお話し。
近藤さんは「自分は薬をやめられないから刑務所に送ってくれ」
と裁判で訴えたのだそうですね。
でも、この人は大丈夫だと、判事さんはそう思われた。
そして、それから4年後の1985年、東京日暮里にダルクが生まれたのだと。

東日本大震災の被災地の仮説住宅で、
「いだけ支援」というのがあることをテレビで観ました。
こんにちは、とか、今日は腰の具合どう？とか、
何気ない声かけが、人が生きる「今日」を支えている。
ボランティアとか、被災者支援とか、
大上段に構えて特別なことをするのではなく、
その人がそこにいる、
そのことがどれだけ支えになっているか、
という話しでした。

そこに、その人がいる。
そんな「今日一日」が、
ダルクの30年間であったのだと思いました。

戦前、大日本製薬という会社が覚せい剤を販売していたこと。
それはヒロポンという薬で、「疲労をポンと取る」という掛け声と
ギリシャ語のピロポノス：労働を愛すという意味を込めて、
これを飲んでよく働きましょう！と。
よい薬として売られていたものであったことも知りました。

前回の授業では、ダニロンという怖い薬の製造・販売をたった7人で中止に導いた、
研究者しずやん（北野静雄先生）のお話を聞いたばかりでしたので、
驚きとともに、思い深く、ヒロポンの話しに聞き入りました。

「そうだよ、ね。」

そしていよいよ、めばさんの詩の朗読です。

めばさんは、めばさんらしく、やわらかく、壇上にあがられました。
ひとつ目の詩は、
ビルの屋上で、落ちないように誰かの手を握り締めている
夢の詩でした。
長い逡巡の中で、めばさんが握っていたその手は、
もしかすると、めばさん自身の手なのだと。
そんな風にわたしには思えました。
(めばさんの深い思いにはとどくわけもないのですが…)

そして二つ目の詩は、あの、ヘルプ。
めばさんの、最後のことばに、
満場の拍手が沸き起こりました。

それは、共感とか、共有とか、そんなことのもっと前に、
ヘルプの、そのあとにつづく日々をも含めた「そうだよ、ね、」
そんな思いの拍手のように感じました。

シャーマンの品格。

プログラムが進むにつれて、圧倒的な空気は、
わたしのからだの中で、あたり前の濃度にやわらいでいきました。

めばさんが、きっと面白い、とおっしゃっていた第二部は
参加することができませんでしたが、
ほんの少しの間に、ずいぶん大きなものを得ることになりました。

めばさん、生きているってすごいことですね。
誰かが生きているってことを、こんなに感じるができるんですね。

制度が、人の気持ちと、ちゃんとつながれるのであれば、
制度は生きてゆく安心になれるのだと思います。
資格が、人の心を、もっともっと深くできるのであれば、
資格も誰かの役に立てるのだと思います。
そして、シャーマンがシャーマンでありつづけることは、
人が生きることそのもの。人をその根っこから支えるために、
守っていかなくてはならないことだと思います。

わたしはそのすべてが共存できることが、この国の品格となるのだと、
ダルク 30 周年に参加させていただき、思いました。
そんな題名の本がありましたね。まだ読んでいなかったのも、
そういうことが書いてあるかどうか読んでみます。

さやさやと
おだやかな一日です。
あなたのことを
思う以外は。

藤原思惟（10 年前のわたしの詩です）

めばさんにお会いできたことに心から感謝いたします。

藤原なおみ